

■スポーツ医科学センター

アスリートをサポート 高気圧酸素治療で早期回復



アスリートのサポートに力を尽くす榎田センター長

外来に入るアスリートをサポートするために、榎田センター長は「T.S.A.」の文字。Tは病院名、Sはスポーツ医科学センター、Aはアスリートサポートチームの頭文字だ。専任のスポーツ整形外科医2人、理学療法士、看護師に加え、9診療科8部門の人材で構成するチームで「真のアスリートサポート」を追求する。

通常の大病院の診療と異なるのは、地域の医療機関からの紹介だけでなく、ホームページでの直接予約を受け付けている点だ。榎田センター長は「アスリートの場合、けがの直後や大会を目前に控えるなど、一日も早く」というニーズが多い。まず患者さんのニーズに合わせなければ、アスリート診療はできないと考えた。アスリート診療は4月の開設から約半年、患者数は当初の約3倍近くに増え、8月は300人以上が受診。アスリートが抱える悩みは、整形外科が扱うけがや骨折などだけでなく、呼吸器や循環器、目や耳などの感覚器、心理面の問題など幅広く、



高気圧酸素治療装置の外観(左)と操作風景

さらに、県内の主要病院と週1回のウェブカンファレンスを行うなど、院外とのネットワーク構築も進む。榎田センター長は「スポーツの原動力は楽しむことであり、競技ができないのはアスリートにとってもつらいこと。センターを基盤として、地域全体でアスリートをサポートしていけたら」と力を込める。

地域医療拠点鳥取大病院 機能強化、施設充実

紙上院内ツアー

鳥取大医学部付属病院(米子市西町、原田省病院長)は今春、国産手術支援ロボット「hinotori(ヒノトリ)」を導入、スポーツ医科学センターと腎センターの新設、高度救命救急センター指定と、さまざまな面で機能を強化した。高度医療の推進に加え、地域とのつながりを重視し、院内施設の充実などホスピタリティーの向上にも力を入れる。新たに加わった機能とそこで奮闘する人たちの思いを中心に、「紙上院内ツアー」として紹介する。

■低侵襲外科センター

ロボット手術を推進 国産ロボ導入し3台体制に



ロボット手術を推進する西村センター長



ヒノトリ、ダビンチ「X」「Xi」の3台体制でロボット手術を推進する低侵襲外科センター

手術室のエントランスは木目調の壁で、窓の外には中海の水景が広がる。3室ある手術室はそれぞれ、日本海のブルー、大山のグリーン、鳥取砂丘のイエローをイメージした色が温かみを感じる。そこで行われているのは、ロボット手術や心臓のカテーテル手術などの先進的な治療。「心と体の両方に優しい低侵襲外科治療」という思いを反映した空間だ。

鳥取大病院は2010年に初めて実施し、現在も中国地方では唯一のロボット心臓手術関連学会協議会認定施設だ。ダビンチによる50例以上を実績。西村元雄センター長(心臓血管外科)は「低侵襲心臓手術の欠点は視野の狭さだが、ダビンチは非常に視野が良

く、鉗子の動きも繊細で、質の高い手術ができる。当センターはその翌年、診療科や職種の垣根を超え、低侵襲手術を安全に推進しよう」と開設され、全国から注目された。

手術支援ロボットは、第4世代のダビンチ「Xi」「Xi」に今春、国産の「ヒノトリ」が加わり、3台体制に。消化器外科▽泌尿器科▽女性診療科▽呼吸器科▽耳鼻咽喉科▽頭頸部外科▽心臓血管外科で幅広く活用され、6月には症例数が延べ2千例を超えた。

心臓のロボット手術は19年に初めて実施し、現在も視野に入る。西村センター長は「地方の病院だからこそ、全国、世界に発信する」という志を持ち、さらにロボット手術を推進させた。新たな技術も取り入れつつ、さらにノウハウを蓄積し、ロボット手術の先駆けとして地域の発展に貢献できれば」と意欲を燃やす。

■腎センター

包括的な腎臓病診療を 関連診療科や職種連携

腎センター内に並ぶ10床のベッドと血液透析の機器。ここでは、主に入院患者を対象とした透析治療が年間延べ約2千件行われている。腎臓病の患者数が増加する中、腎センターでは、腎臓内科と泌尿器科を核に腎臓病に関わる診療科や職種が連携し、外来▽血液浄化▽腎移植の3部門で、診断から治療まで包括的な診療を目指している。

腎臓病の診療は従来、透析は腎臓内科、腎移植は泌尿器科を中心に行うなど、複数の診療科が担っていたが、センター化することで院内の協力体制を強化。専任2人を含む医師8人、看護師や栄養士など多職種が関わり、定期的なカンファ



腎臓病診療の発展を目指す腎センターの引田センター長(左)と井山拓治医師

腎臓病は進行して腎不全になると、血液透析や腎移植といった治療が必要になるため、早期発見・治療が重要となる。鳥取県内の腎臓専門医の数は20人余りで、人材育成も課題だ。引田センター長は「腎臓に対する専門的な知識を持った医師やスタッフを増やして腎臓病の診療を充実させるとともに、一般向けの啓発活動にも力を入れ、末期腎不全に至る患者さんを減らしたい」と展望する。

■高度救命救急センター

救急医療「最後のとりで」 多職種のチーム医療展開

重症患者などの治療を行う救急初療室(E R)や除染室、鳥取県のドクターヘリが待機するヘリポート、ドクターカー、人工心肺装置「ECMO(エクモ)」などを備え、日夜患者を受け入れる救急医療の「最後のとりで」。ここに4月、

鳥取県初の「高度救命救急センター」の看板が掲げられた。高度救命救急センターは、広範囲熱傷、指肢切断、急性中毒などの特殊疾患に対する診療機能を持つ施設として都道府県が指定する。センターでは外来受診に加

え、救急車での搬送数が年間約4千件、ドクターカーとドクターヘリの出動が合計約800件。エリアは広域に及び、症状も幅広い。「鳥取県だからこそ、高度な医療ができる」と言う上田敬博教授は「チーム医療が非常にやりやすく、設備も都市部のセンターにひけをとらない」と、その理由を説明する。

スタッフは、医師12人を含め総勢100人以上。看護師、理学療法士、薬剤師など多職種によるチームで、他の診療科とも連携して治療を展開する。新たに作ったセンターのロゴマークには、「Power of Unity(団結力)」の文字。上田教授は「まずは、患者さんからも地域の医療機関からも信頼されるセンターでありたい。その上でスタッフにいつも言っているのは、『小さくまともならず、世界を目指そう』と。決して目指せない目標ではないはず」と、前を向く。



救命の最前線でチーム医療を展開する高度救命救急センターのスタッフ

病院を文化発信拠点に ホスピタルアート

2022年4月設置

病院を文化発信拠点の一つとして、院内のさまざまな場所にアートの作品を展示。外来棟1階のホスピタルアートは、活躍する大宮エリーさんがスリランカの海を描いた

関係者など有料宿泊施設 ゲストハウス

2022年2月オープン

外来棟前に建つゲストハウス棟内にある、患者、病院関係者向けの有料宿泊施設。シングル8室、ツイン3室で、車いす対応の客室もある

医療テーマのセレクト書店 カニジルブックストア

2021年9月オープン

ノンフィクション、医療、QOL(生活の質)をテーマにしたセレクト書店。病院広報誌「カニジル」の田崎健太編集長が社長を務めるベンチャー企業「カニジル」の作家、鈴木ふみさん(写真)が店長を務める

院内スポット紹介